

は、市から水が届き携帯ガスコンロや石油ストーブでやかんにお湯を沸かせた。しかし、津波被害のあった地区では、水の配給が遅れジュース等糖分を含む水分が配給)。

- ・ 発災当日、出産した産婦の新生児訪問。妊産婦はホールにすべて集め、看護師が診ていた。産後3日で病院から退院させられていた。
- ・ 新生児や幼いその他の子ども達を連れて給水所に何時間も並んだり、買い物に並んだり、大変だったと聞いた。(親戚も被災、母子家庭のため協力してくれる家族もおらず母一人で大変だった)
- ・ 避難所の間取りを考慮し、入る人数等を考慮した部屋割りを決める必要があった。
- ・ 津波被災した玉中では、子どものいる家庭が一箇所のフロアーにまとめていた。また、他の避難所でも家族等でまとまって過ごしていた。
- ・ 通信は市役所や避難所は防災無線で連絡。情報収集は全て人力。
- ・ ライフラインが途絶え、ケータイや電話が使えず、通信手段は防災無線しか使えず、周知したいことはラジオやテレビでも流してもらおう。(コピー機は発電機でかろうじて使用していたため使用制限)
- ・ 乳幼児に係わる市の事業が全て中止、広報手段がない、確認に来た一人ひとり口頭で伝えた。
- ・ 母子保健に特化できず、全体的な体制(マンパワーの確保・避難所・救護所(救護所24時間開設、夜間避難所巡回等)の整備、対応に追われた。
- ・ 避難所では出産直後の方と新生児・嘔吐や下痢感染症の方・要介護の方・発達障害の方等部屋を分けて対応。

(母子以外)

- ・ 母子に限らず津波から避難者は、常備薬・お薬手帳・お金・カード・身分を証明するもの持っておらず、常備薬で飲んでいる薬の名前や量も分かる人は少なかった。
- ・ 常備薬がないのでどうしたらよいかと相談されることが多かった。病院も開いているか不明だが、病院に自分で問い合わせしてみようという他なかった。
- ・ 糖尿病でインシュリン等をしている方から避難所で配られるのはジュース、食べ物の配給も少ない、インシュリンを打つ量を少なくしたりして良いか対応に苦慮。
- ・ がんのため抗がん剤を服薬しているが、持ち出せなかったため長期間飲まなくても大丈夫か等、薬に関する相談が多数あった。救護所にいるDrに無線で確認しながら相談に対応した。
- ・ 発災直後避難所、津波で濡れた洋服でそのまま、床にしくものや毛布もなくただ床に寝転がっている。子どもの服や避難者の衣類確保、着替えかき集める。

問1-3. 発災(3月11日)から3月14日頃(フェーズ0・1)に、そのほかの母子保健に関わる事項(例えば、外国人母子への対応、親を亡くした子どもへの対応、性被害の予防など)で支援したことはありますか。あるいは、どのような支援が必要だったと思いますか(不足していた物資を含めて)。また、経験した困難やその解決策などをお聞かせください。

- ・ 外国人が体調不良を訴えても英語が分からず、ニュアンスで高血圧の薬を服用していたので

薬が欲しいと求められているようだったので救護所に搬送し Dr に直接訴えてもらった。

問 2-1. 昨年 3 月中（フェーズ 2）に、妊産婦や乳幼児をもつ母親がいましたか。障がい児や低出生体重児をもつ母子がいましたか。いた場合、どのような支援（物資、場所、周知方法などを含めて）をしましたか。あるいは必要であったと思う支援がありますか（不足していた物資を含めて）。また、経験された困難やその解決策などをお聞かせください。

・3月16日からの電話が一部を除きほぼ開通、各保健師が担当している発達障害等を持つ児のいる家庭へ電話、安否確認。小さい乳幼児のいる家庭ではミルク・紙オムツの不足、食糧の不足の訴え。必要な方には保健センターでミルク・紙オムツを配給していることを伝えた。また、給水、買出し、に並ばなければならず大変との話あり。

・飲水の確保で精一杯、乳児をお風呂に入りたいがお風呂が沸かせないので、衣装ケースにお湯を入れて入浴、衛生状態は悪かった。

・お産セット・産後セット・ミルク等、ない状態続く。医療チームの交代に合わせて足りないものを要望、引き継いでもらい次のチームに持ってきてもらったりした。

・母子手帳を交付したリストに基づき、妊婦産婦に電話し、安否確認と状況確認。

（乳幼児がいる家庭は親戚や知り合いがミルク・オムツ・その他必要な物を持ってきてくれたという方、自宅にストックしておいたので当分は大丈夫という方が多かった。ミルク・オムツをあげますといっても、自分は大丈夫なのでもっと大変な方にあげてくださいと遠慮されることも度々あった。乳幼児や障害を持つ子を持った家庭は、既に安全な県外の親戚宅等に避難したという方が多かった。）

・支援物資で来るオムツは新生児サイズ S・M さいずが多く、L やビックサイズが少なかった。

・他市町村で被災し、避難してきた母子が、妊婦健診や乳幼児健診等のようにこれから受けていったら良いか相談に来たが、国・県・市の対応方法が明確にされておらず、対応に苦慮。隣接する市町では役所が被災しやり取りできず、支援ができないとのことで岩沼市に相談するように伝えていたようだ。

・発達障害の子は避難所にいれない、避難所となった保健センター内に個別枠をつくって居場所を作り対応。

・災害対応で目の前にやることがたくさんあり、マンパワー不足。

・その都度出てきたことに対応するしかなかった。マニュアルどおりではないことが起きるのでマニュアル通りでは動けない、いろんな経験を工夫していった。

・3月18日から全国から医療チーム・心のケアチーム等が到着し、避難所等の巡回診断や相談開始。その調整や巡回診療の手伝い等に追われる。

・医療チームからのアドバイスもあり、各避難所の保健師や市の保健師、医療スタッフで朝夕 2 回ミーティングを行い、情報収集や情報共有、問題への改善・対策等について検討・実施。

・この地域では保健師が避難所運営に入ることはなかったので、保健師活動に特化できた。

・各避難所の感染症対策で、子ども達の発熱や健康面で空気清浄機や加湿器を配備しようということで、インターネットなどで呼びかけ、多数寄せられたものを避難所に配布

<p>(母子以外)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・お金の出どころが分からず、国・県・市、どこが対応するのか、どうするのか何も決まっていな、対応できない状況続いた。助成金の使い方も何もきまっていな、だから誰も答えられない。</li> <li>・避難所の精神状態悪化してきていた。</li> <li>・保健センターに支援物資が山積み、どかさないとセンターが使えない状況。</li> <li>・各避難所等でインフルエンザが蔓延し始め、患者隔離や体調管理、診療調整や補助等に追われる。</li> <li>・各避難所等に他県より来た保健師チームに常駐を依頼、直接的な避難所対応をお願いした。避難所にいる方々の健康管理や問題があれば保健センターに連絡をもらい対応を検討。</li> <li>・各避難所の避難者減少(自宅に戻る人が増えた)により、避難所が数カ所に集約されていった。その際、被災前に住んでいた地区毎に部屋割りがされたので、見知った方々がまとまって生活していた。</li> </ul>
<p>問2-2. 昨年3月中(フェーズ2)に、そのほかの母子保健に関わること(例えば、外国人母子への対応、親を亡くした子どもへの対応、性被害の予防など)で支援したことはありますか。必要だったと思う支援がありますか(不足していた物資を含めて)。また、経験した困難やその解決策などをお聞かせください。</p>
<p>問3. 通常業務、例えば乳幼児健診や予防接種などはいつ頃から再開されましたか。再開に向け苦労されたことや支援が必要であったことがありましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平成23年4月から準備に入り、5月から通常業務再開。滞っていた3月から5月までの母子保健事業やその他の事業をこなすためハードスケジュールで準備・調整・実施。また、その電話問合せ対応。通常業務と被災者支援を同時に行わなければならない、業務量・負担が増大。</li> <li>・5月から通常業務再開、2ヶ月間は倍こなした。最初は津波の人々だったが福島の人たちも来て、母子手帳の再交付等を行なった。</li> <li>・通常業務に戻るため、避難していた方々には4月末を目処に退去となり、退去まで支援続けた。自力で動けない方々・要介護の方・高齢者等大変な方が多く残っていたため、学校とかではトイレが和式でそういう方は洋式でないとい入れないなどの問題があった。</li> </ul>
<p>問4-1 昨年4月から5月(フェーズ3)に、妊産婦や乳幼児をもつ母親がいましたか。障がい児や低出生体重児をもつ母子がいましたか。いた場合、どのような支援(物資、場所、周知方法などを含めて)をしましたか。あるいは、どのような支援が必要だったと思いますか(不足していた物資を含めて)。また、経験した困難やその解決策などをお聞かせください。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自宅全壊や原発を恐れ、県外転出となった障害児等の転出先への申し送り業務。</li> <li>・市事業再開+心のケア のチラシ作成し、配布し周知。また、電話問い合わせ対応。</li> <li>・広報で周知し、保健センターでミルク・おしりふき・紙オムツ等の乳幼児用の支援物資を支</li> </ul>

給。

・母と子の心の不安を調査。情報収集のため、健診を大事にしていこうと心のケアセンター・医師と協力して、特に津波地区の幼児1歳3歳にアンケートを前もって配布し実施。チェックリストをつくり個別指導が必要かどうか等、情報共有し対応。親も気づいていない子どもの心のダメージ出てきている。

・月水金と赤ちゃんホットラインを震災前からやってきたが電話相談を再開。

・保健センターで健康相談いつでも受けることができるチラシ配布。

・菓子パンや甘いジュースがどっさり、親や職員の余裕なさも影響し、学童や幼児は自由に食べてしまっていた。虫歯など心配するほどだったが4月から口腔ケアの先生がいらして対応。

・仮設での生活音の問題、子どもは大きな声をあげて遊べないなどの問題もあちこちからでてきていた。十分に子どもも遊べていなかったがボランティアの協力で遊びをしていただいた。ほかの避難所でも必要と話していた。

・栄養面での問題が出てきた。仮設ではものがあまり置けない、置いても腐る、結果外食増える。バランス崩す悪循環。母子に影響があると思う(お菓子・炭酸飲料・栄養バランス面等)。

問4-2. 4月から5月(フェーズ3)に、そのほかの母子保健に関わる事(例えば、外国人母子への対応、親を亡くした子どもへの対応、性被害の予防など)で支援したことはありますか。必要だったと思う支援(物資、場所、周知方法などを含めて)がありますか。また、経験された困難やその解決策などをお聞かせください。

・外国人と夫婦の方の家庭が避難所へ来た。元々夫婦問題を抱えていたようだが避難所でスペースが取れず、ネグレクト・育児放棄や夫婦喧嘩、避難所を出てしまったという問題発生。家庭の中にある問題が環境が変わることによってそれまで何とかできていたこと表面化してくる。

・家庭内でのいじめや仮設内で問題が起きたり様々な問題が表面化。

問5-1. 昨年6月から9月まで(フェーズ4)に、妊産婦や乳幼児をもつ母親がいましたか。障がい児や低出生体重児をもつ母親がいましたか。いた場合、どのような支援(物資、場所、周知方法などを含めて)をしましたか。あるいは、どのような支援が必要だったと思いますか(不足していた物資を含めて)。また、経験された困難やその解決策などをお聞かせください。

・県や子どもの心のケアチームと一緒に保健センターで相談実施。震災後落ち着かない、感情コントロールが難しい等の相談。

・教育委員会・県の福祉課と連携して記録を共有していった。

・6月初めに社会福祉課と教育委員会のほうから死亡児童とか遺児の情報・名簿を頂き、残された家族の状態等を情報共有した。

問5-2. 6月から9月まで(フェーズ4)に、そのほかの母子保健に関わる事(例えば、外国人母子への対応、親を亡くした子どもへの対応、性被害の予防など)で支援したことはありますか。必要だったと思う支援がありますか。また、経験した困難なことやその解

<p>決策などがあればお聞かせください。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校の保健師とも連携。この時は震災後の課題・対応をどうしていくかを検討。津波地区の小学校の先生方は大変だった。</li> <li>・生活再建支援課の所長はじめ保健師達が仮設住宅内に託児所を設けてくださった。そういう支援がないとダメだと思った。</li> <li>・震災後の余震や生活環境、家族状況の変化に伴う子どもの心の不安定さの問題はあったが、通常業務が再開されたのが5月だったのでだいぶ子ども達も落ち着いてきている状況。状況のひどいケースは、専門の子ども心のケア相談につないだ。</li> </ul>
<p>問6-1. 昨年10月以降から現在まで（フェーズ4）に、妊産婦や乳幼児をもつ母子、障がい児や低出生体重児をもつ母2に対しどのような支援（物資、場所、周知方法などを含めて）をしましたか。あるいは、どのような支援が必要だったと思いますか（不足していた物資を含めて）。また、経験した困難なことやその解決策などがあればお聞かせください。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・通常業務＋被災者支援</li> </ul>
<p>問6-2. 10月以降から現在まで（フェーズ4）にそのほかの母子保健に関わること（例えば、外国人母子への対応、親を亡くした子どもへの対応、性被害の予防など）で支援したことはありますか。また、必要だったと思う支援がありますか。また、経験した困難なことやその解決策などがあればお聞かせください。</p>
<p>問7. 発災前には、どのような母子保健活動をしていましたか。その時に課題であったことは、発災後はいかがでしたか。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・発災前後で母子保健活動の課題やすべきことは比較しても大きな変化はなし。</li> </ul>
<p>問8. 災害を経験され、平時から必要な母子保健活動として、どのようなことがあると思われますか。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・母子保健活動の中でも、災害時に自ら身を守るため知識等について啓蒙・普及が必要。災害時は市役所やその他の公共機関の支援が平常時と同じように受けられるとは限らない。住民一人一人が自分の身や子どもの身をどのように守るかの知識を身に付け、災害時に備えて準備・備蓄等をしておく必要がある。市役所のマンパワーも限界があり、災害時の備えや支援を全て市役所職員が担うにも限界がある。</li> <li>・障害を持つ子を抱える家庭は、その家庭内だけでなく地域とのつながりを深く持つ必要がある。</li> <li>・地域に障害を持つ子どもがいること、その障害について理解してもらっていると、災害時に地域で手を貸してくれる方も出てくる。医療機関や学校とのつながりも大切、支援につながる。</li> <li>・母子保健事業中に大災害が発生することを想定し、避難訓練を実施することが必要。具体的な対応や役割分担などをシュミレーションしておくが良い。</li> <li>・母親達のダメージが今も大きい。一年以上経ってもニードがある。継続的な支援必要。普段が大事ということを実感。</li> </ul>

- ・被災が広範囲であっても、迅速に支援者来て欲しい。派遣体制整備。
- ・ボランティア等調整が大変。来るはずの医療チームが来なかったり、来ててもすぐ帰ってしまったり。
- ・被災県の方々からのアドバイス・教えが大変よかった。少しでも先が見える事が大きい。
- ・母も子もわからない気付かない事がある。話を聞いてあげないと。
- ・早く健診再開してよかった。
- ・発災時、派遣された医療チームの中に公衆衛生の先生、必要ないと思ったがとても大きかった。きめ細かい指示、大きい。
- ・他県のチームが避難所に張り付くと徹底してもらえる。自分たち巡回だけでは徹底できなかった。長く張り付けてくださることで徹底されることも実感。
- ・全戸訪問を普段から徹底していた。一人ひとりの顔が分かる。きめ細やかな住民対応、人脈、ネットワーク、関係づくり、そういう常日頃からの連携やネットワークが役に立った。普段からきちんとしておくことが大事。
- ・県・市、この地域は精神保健活動も丁寧にやってきた歴史があり、それが功を奏した。住民自身も誰が助けてくれるのか=保健センターを分かっていることが大事。
- ・普段業務で母子手帳交付者リストなどを作っていたことで電話開通後の連絡が早期に対応できたことは良かった。普段がどれだけ大事かを痛感。
- ・マンパワー不足、一番感じる。どこも人手が足りない、残された私達は休めない。平常業務も1.5倍以上に加え、震災被災者対応。倒れられない状況。支援者支援体制整備。
- ・どこに言えばマンパワー支援してもらえるのか、コーディネートしてくれるのかわからない。調整窓口になってくれるところ欲しかった。
- ・保健業務・被災者支援・支援者の心のケア等、支援者のための支援体制が重要。
- ・福島の避難者が北上。県境の地域は物件も少ないため、更に北上、県境地区の避難者も含めこの地区に流入。住民票は移していないが居住者は多く、子どもを持つ世帯も多く、父親は仕事が電源地域なので通える範囲で言うところの地区になる。保健サービスの提供をどうするか。
- ・父親仕事で不在、祖父母や子ども達を自分一人が見ないといけないプレッシャー、お母さんたちがじつは一番被災ダメージを受けている。継続支援が必要。
- ・公共機関はこういったとき頼られることが多い。しかし、発災時できることは限られている。通常時から子どもを持つ家庭では、身に付けたりストックしたりリストを作ったり等、備えて準備をしておくことが大事。

問9. 支援者ご本人やそのご家族の健康管理、あるいは生活管理をどのようにしていましたか。  
また、どのように健康管理や生活管理をする必要があると思いますか。

- ・日赤チームからのアドバイス、職員の健康管理、シフトを作った。
- ・無我夢中、がむしゃら、目の前にやること山積み、テンション高く眠らなくても動ける、休み取りなさいと言われても、上に行ってくれないと悪くて休めない、休まず動き続けた。周りの理解必要。長く活動するためにも自分の管理や職員の管理は必要。

- ・災害時、支援者がやらなければならないことは目の前にたくさんあり、緊張感が長時間・長期間に渡り続く。職員の健康管理・勤務体制のマニュアル化必要。
- ・発災翌朝、子ども達を実家に頼み勤務。長期間に離れて暮らすこと、辛かった。
- ・保育園児だった息子は半年以上夜泣きというか大声でうなされることが続いた。
- ・発災後すぐに救護所開設されそこに従事、両親や子どもがどのように過ごしているかもわからず心配だった。
- ・保育所は受け入れてくれても不規則勤務で子どもの送迎ができないため預けることができなかった。
- ・大きな余震があると真夜中でも出勤しなければならず、自分の子どもの心理面が心配。
- ・発災後数日は1日小さいおにぎり1-2個でしのいだ。その後の食事は支援物資で来る菓子パンやインスタントラーメン等がメイン。不規則勤務で自分が買い物に行くことはできず、栄養バランスは崩れていた。
- ・福島原発の放射能について新聞等で報じられていたが、仕事であれば雨の中でも外にでなければならず、とても不安があった。

## インタビューガイド

研究協力者のメンバーの属性（宮城県 M町 2町）

1. 県（ 人） 2. 市町村（2人）

問1-1. 発災（3月11日）から3月14日頃（フェーズ0・1）に行政職員として優先して実施した業務はどのようなことでしたか。

- ・住民の避難誘導。
- ・当日：避難所に行くよう指示されたので救護用品をもって向かった。
- ・発災直後、すぐに保健センターに救護所開設となりその準備と各避難所へ向かい状況確認、体調不良者、要医療者等の確認作業。
- ・収集した情報の共有と対応の検討。
- ・当日、避難所の設営、保健センターから必要な物(座布団・毛布等)を外に出した。
- ・避難所巡回
- ・避難所を巡回し体調不良者、要医療者を早期発見し、3/12～は救護所に公用車で搬送し、日赤救護班の応急処置後避難所へ公用車で送っていた。
- ・救護所運営のため医師会との調整や広報医療機関と連携。救護所 24 時間運営。また、避難所の巡回、健康相談等に従事。
- ・外に避難してくる、寒いので毛布、ストーブを全部出して、保健センターにある座布団やその他を外に出す作業から始まった。日赤の毛布も保健センターに備蓄していましたので。
- ・退院したばかりの避難者、保健センターでその方の点滴の処置から入った。近くの病院の医師を呼んでお願いし、点滴を持ってきていただき、点滴をしてその管理をした。
- ・ずぶぬれの人が運ばれてきた。流されてきた人を避難しているときに拾ったと言うことだった。その時初めて津波が来たとわかった状況だった。
- ・保健センターが避難所になった時点で、介護の必要な人などが詰めかけた。その時は暗くてわからなかったが、夜が明けてみたら介護が必要な人がいっぱいいた。
- ・薬が足りなかったが、薬剤師会などの協力で入ってくるようになった。

問1-2. 発災（3月11日）から3月14日頃（フェーズ0・1）に妊産婦や乳幼児をもつ母子に対して、また、障がい児や低出生体重児をもつ母子にたいして、どのような支援（物資、場所、周知方法などを含めて）をしましたか、あるいはどのような支援が必要だったと思いますか（不足していた物資を含めて）。また、経験した困難やその解決策などをお聞かせください。

- ・当日：喘息のある子が高熱を出した。薬もなく、電話も通じず、直接医院にその子を連れていった。電気が止まっていたので、薬も処方できなかった。
- ・トイレの対策が必要。
- ・低体重児をもつ母親所在確認できなかった。
- ・妊産婦や乳幼児をもつ母子には授乳室を作った。
- ・何もかもが不足していた。ティッシュ、ガムテープ等。
- ・避難所にいた出産間近の妊婦を救護所で健康管理。その後、地元の産科病院へ連絡し受け入

れ調整。

- ・重度障害(他市町村住民)を持つ祖母から、医療機関に子どもを戻したい、市で通行許可を出してほしいと泣いてせがまれたが、お住まいの市町村へ相談してとしか言えなかった。
- ・地元の産科病院よりミルク・オムツの要請。
- ・保健センターの試供品ミルク・オムツ、町内薬局からの調達品を避難所巡回の際、配布。
- ・避難所で乳児用のミルク・オムツ・お湯の不足があったが、支援物資はまだ届かず、市での備蓄もなかった。母親同士でミルクを分けしのいだ。
- ・津波被害のない地区の避難所、市から飲料水が届き携帯ガスコンロにやかんでお湯が沸かし使用。津波被害のあった地区、水の配給が遅れジュース等糖分を含む水分が配布。
- ・発災当日出産した産婦の新生児訪問で、妊産婦はホールにすべて集められそこで看護師が見ていた。産後3日で病院から退院。
- ・新生児や幼いその他の子ども達をつれて給水所に、買い物に何時間も並んだ。親戚も被災、母子家庭のため協力してくれる家族もおらず母親1人で抱えていた。
- ・母子に限らず命からがら逃げてきた避難者は、常備薬やお薬手帳等、お金やカード、身分を証明するもの何も持ってない。常備薬で飲んでいる薬の名前や量も分かる人は少なかった。常備薬がない、どうしたらよいかと相談多かった。病院に自分で問い合わせしてみても言う他なかった。
- ・糖尿病でインシュリン等をしている方、ジュース、食べ物の配給も少ない、インシュリンを打つ量を少なくしたりして良いか相談多かった。
- ・がんのため抗がん剤服薬、持ち出せなかったため長期間飲まなくても大丈夫か、薬に関する相談が多数。救護所にいる医者に無線で確認しながら相談に対応。
- ・避難所の間取りを考慮し、入る人数等を考慮した部屋割を決める必要があった。
- ・障害児で自閉症の重度の子どもも避難していたが、一晩だけ。そのあと支援学校で受け入れてくださり翌日からはそちらに行った。
- ・ぜんそくの持病がある障害の子どもが高熱を出した。薬も電話もない、近くの小児科の方に車で搬送、診ては頂いたが、停電で測りで計量できず、薬も処方できなかった。何もできなかった。無力感。
- ・津波地区と津波を逃れた地区との差がはっきりしていた。発災の翌々日に「今日は健康相談ないんですか」といらした方がいるくらい差があった。
- ・母子手帳を取りにいらした方もいたが、避難所を離れることができず、本庁に残った職員に配布をお願いし対応した。
- ・混乱していた、外部からの情報も入ってこない、目の前にいる方達への対応に追われた。
- ・支援学校が早めに解放という情報、自閉症の子ども達はそちらに行くと聞いた。就学前の障害を持つ子ども達は、たぶん県外か、避難所では見かけなかった。

問1-3. 発災(3月11日)から3月14日頃(フェーズ0・1)に、そのほかの母子保健に関わる事項(例えば、外国人母子への対応、親を亡くした子どもへの対応、性被害の予防

など)で支援したことはありますか。あるいは、どのような支援が必要だったと思いますか(不足していた物資を含めて)。また、経験した困難やその解決策などをお聞かせください。

- ・混乱していて外部からの情報も乏しく、今自分がいる避難所の人のことだけで精一杯。
- ・それでも母子手帳をとりに来た人…セットを組んでもらって本庁に残った職員に配布してもらった。
- ・外国人が体調不良を訴えても英語が分からず、薬が欲しいと求められているようだったので救護所に搬送、医者へ直接訴えてもらった。
- ・各避難所に他県より来た保健師チームに常駐を依頼。避難所にいる方々の健康管理や問題があれば保健センターに連絡をもらい対応を検討。直接的な避難所対応をお願いした。
- ・各避難所の保健師や市の保健師、医療スタッフが朝・夕2回ミーティングを行い、情報共有や問題への対応等について検討、実施。
- ・震災前から関わりのあった中国人の妊婦が避難所にいた。健診も母子手帳の受け取りにも来なかった方、二人目の妊娠だった。栄養状態も良くない、お金もない、助産制度を避難所にいる間に保健所に来て頂き、その手続きを取った。二人目の子どもなので、上の子は避難所でほかの方が見てくれるなど、そういった面でムードメーカーとかになってくれていた。
- ・外国からのお嫁さんが多い地区、ほかにも妊婦ではないけれどもいらして、みなさんで話をしていた。

問2-1. 昨年3月中(フェーズ2)に、妊産婦や乳幼児をもつ母親がいましたか。障がい児や低出生体重児をもつ母子がいましたか。いた場合、どのような支援(物資、場所、周知方法などを含めて)をしましたか。あるいは必要であったと思う支援がありますか(不足していた物資を含めて)。また、経験された困難やその解決策などをお聞かせください。

- ・入浴できないので、陰部発赤、痛み(+)
- ・妊産婦、乳幼児をもつ母親がいた
- ・衛生管理、マスク、手洗い、消毒の支援をした。
- ・2週間後、妊婦の安否確認を実施。母子手帳台帳で電話。4分の1は携帯でつながる。
- ・母子手帳・母子手帳別冊の流失、再交付。
- ・衛生管理、嘔吐、下痢、感染症対策。隔離室をつくり、感染予防。手洗い・うがい・マスクの着用を徹底させた。そこは広がらずに済んだ。
- ・風呂が3月終わりまで入れなかった、子どもの陰部が焼けて赤くはれ上がり痛がるというのがあった。入浴ができる前だったので、赤ちゃんのおしりふきで凌いだ。
- ・保育士の方がいた避難所、3月末頃遊びのスペースを確保してくれた。体操マット2枚くらいで、遊びの開設時間、絵本の読み聞かせなど時間を決めて入ってくれたので、母子の避難所での支援ができたと思う。子どもがうるさいなどということもあったので助かりました。
- ・課長が定期的に回ってきて業務連絡、支援医療チーム等の情報を頂いたりした。医療チームが来るとなると準備をして各々がその現場でルールを作ってやった。

- ・精神の人が1週間から10日くらいで、見えなかった部分が徐々に現れてきた。夜、不穏な声を出すなどの動きが出てくる。そういうときに幼児が泣いたりする。
- ・嘔吐、下痢が出た時、ノロウィルスの疑いで大人も過敏状態に。嘔吐物が隣の人の布団にかかり、かかった人が「捨ててください!」と、吐いた子どもも家族もいたたまれない思いで布団を処分した。幸いノロではなくて蔓延もしなかったが。
- ・感染症については避難されている方も過敏になっていた。心のケアチームが入ってくださり、そのあとはチームにお任せして何とか収まったと思う。
- ・新生児訪問をお願いしている助産師が、震災翌日に来てくださった。約2週間後から妊婦の安否確認を実施してもらった。
- ・母子の部分では全然動けなかった。携帯電話の連絡先を控えていた方は全員つながり安否確認できた。一人だけ亡くなった方がいた。
- ・避難所に把握している限り2-3人、妊婦がいた。助産師に訪問をして頂いた。おなかが張っている妊婦、病院で対応できず、助産師に依頼、その対応をして頂いた。もしもの時には救急車を呼ぶように避難所の妊婦に話をして、妊婦の管理は行っていた。
- ・女性用の生理用のナプキンが足りなかった。各避難所にいきわたったのはかなり後だった。保健センターに来られる方にも1日分ずつ配布。
- ・インフルエンザがかなり発生。各避難所で隔離室を設けて隔離して対応。

問2-2. 昨年3月中(フェーズ2)に、そのほかの母子保健に関わること(例えば、外国人母子への対応、親を亡くした子どもへの対応、性被害の予防など)で支援したことはありますか。必要だったと思う支援がありますか(不足していた物資を含めて)。また、経験した困難やその解決策などをお聞かせください。

- ・外国人の方も生活に慣れている方だったので、特に一般の町民と変わったことはなかった。
- ・避難されている中で、父親を亡くされ祖父も行方不明、母親と弟と3人で避難している子どもがインフルエンザにかかった。医療チームが3/18くらいに入り、薬の処方。巡回で帰った後、腹痛の訴えがあり救急車で運ばれた。薬の副作用ではなくて、父親が亡くなられてからずっと腹痛を訴えられていて、精神的な部分だったようだ。周りの人達で、みんなで見守りしたが、4月に入り転出した。児相は4月から入ってきたので、つなげることができなかった。震災でご家族亡くされて、そのままフォローできずに転出された方は多かった。
- ・幼稚園で津波にのまれた子どもの相談、心のケアで児相さんにつないだケース。
- ・片親で離婚して、母王やと祖母と住んでいた子ども、母親が震災で亡くなられて、祖母につらく当たって大変な状況だったようだ。中学生だったので心のケアにつなげようとしても本人が拒否。その後、学校でスクールカウンセラーが対応した。

問3. 通常業務、例えば乳幼児健診や予防接種などはいつ頃から再開されましたか。再開に向け苦労されたことや支援が必要であったことがありましたか。

- ・通常業務に少しずつ戻るため、避難所は応援保健師に任せていくよう指示。4月に入ってから日中の半日は保健センターで通常業務再開の準備などを行うようになった。

・H23.5月～通常業務が再開。滞っていた3月～5月までの母子保健事業やその他の事業をこなす

ためハードスケジュールで準備・調整・実施に追われた。また、その電話問合せに対応。通常業務と被災者支援を同時に行わなければならない、業務量が増大。

- ・5月健診再開。
- ・予防接種4・5月ポリオ秋のみ、日脳6月個別、4・5月MR3期8月。集団6月実施、秋ポリオ2回→4回へ
- ・母子手帳は週1回発行日を決めてやった、4/4開始。
- ・健診は4/13に3歳、6か月の健診を行った。発災前に3歳、6か月の健診は終わっていたので、4つの健診を休んで再開、4月は日数を増やさず対象人数を増やして対応した。
- ・4月から6月にかけては母子手帳の再交付も多かったが、比較的落ち着きを取り戻し、職員も休みをとれるようになってきた。
- ・4月からは通常業務はできた。
- ・5月中旬、健診再開。し保健師、栄養士、臨時、看護師のボランティアの方々をお願いして実施。児相のパンフレットを健診の時に配布。
- ・予防接種は個別ではなく集団でやっていたが、4月予定のものは延期と中止。元々6月に集団予防接種する予定のものは個別に切り替える形で実施。

問4-1 昨年4月から5月（フェーズ3）に、妊産婦や乳幼児をもつ母親がいましたか。障がい児や低出生体重児をもつ母親がいましたか。いた場合、どのような支援（物資、場所、周知方法などを含めて）をしましたか。あるいは、どのような支援が必要だったと思いますか（不足していた物資を含めて）。また、経験した困難やその解決策などをお聞かせください。

- ・自宅全壊や原発を恐れ圏外転出となった障害児等の転出先への申し送り業務。
- ・市事業再開+心のケアのチラシ作製し等で配布し周知。また、電話問い合わせも多かった。
- ・広報で周知し、保健センターでミルク・オムツ・おしりふき等の乳幼児用の支援物資を支給。
- ・4月、新生児訪問再開、乳幼児健診対象者のリスト作成、カルテと共に安否確認
- ・5月、乳幼児健診。保健センター避難所のため地区公会堂で実施。
- ・児相の巡回相談
- ・健診時、心のケアのチラシを配布、震災後に泣いたり甘えたりするのは当たり前だということを伝え、問診の中にも入れるように努めた。
- ・心のケアをコンスタントに利用したいという方も出てきた。保健センターを利用して定期的に面談を行った。
- ・仮設への入居は点数化をして、妊婦は何点、要介護は何点ということで優先順位を決めて入居の決定をした。全員が弱者だと大変なので、審査会で入れました。しかし、今までの居住地のコミュニティはバラバラになってしまった、あとになって地区のまとまりがあった方が…どうだったのかということも言われた。

- ・支援看護師・保健師が巡回。全戸訪問の健康調査を5月、6月に行った。その中から心のケアなど、「施設がなくなった、どこに通ったらよいか」といった相談等を拾い上げ支援につないだ。自宅で被災にあわれていた方、そのあと仮設に回ったという状況。
- ・4月に入っても保健センターが福祉避難所と救護所で使えない状態。4月助産師に新生児訪問再開依頼。直接訪問し、お話しを伺って頂いた。
- ・4月は母子の事業ができない状態、乳幼児健診対象者リスト作成を大学の先生に依頼。その方たちが今どこにいるのかをカルテと一緒にリストを作って頂いた。まだ救護所と避難所で動けなかったのも、それも助産師依頼しやって頂いた。
- ・子どもの相談はこのころから上がってきた。避難所にいる子どもの赤ちゃん返り、保育所も被災して子どもも亡くなっている、その被災した保育所の子どもで赤ちゃん返り、夜泣きなどで相談があった。その頃児相が巡回、そちらにつないで保護して頂いた。

問4-2. 4月から5月（フェーズ3）に、そのほかの母子保健に関わる事（例えば、外国人母子への対応、親を亡くした子どもへの対応、性被害の予防など）で支援したことはありますか。必要だったと思う支援（物資、場所、周知方法などを含めて）がありますか。また、経験された困難やその解決策などをお聞かせください。

問5-1. 昨年6月から9月まで（フェーズ4）に、妊産婦や乳幼児をもつ母親がいましたか。障がい児や低出生体重児をもつ母親がいましたか。いた場合、どのような支援（物資、場所、周知方法などを含めて）をしましたか。あるいは、どのような支援が必要だったと思いますか（不足していた物資を含めて）。また、経験された困難やその解決策などをお聞かせください。

- ・県や子どもの心のケアチームと一緒に保健センターで相談実施。震災後落ち着かない、感情コントロールが難しい等の相談。
- ・9月、子どもの心の健康サポート事業 1.6、3歳児健診
- ・子総の巡回相談
- ・講演会(8月、12月)

問5-2. 6月から9月まで（フェーズ4）に、そのほかの母子保健に関わる事（例えば、外国人母子への対応、親を亡くした子どもへの対応、性被害の予防など）で支援したことはありますか。必要だったと思う支援がありますか。また、経験した困難なことやその解決策などがあればお聞かせください。

- ・虐待。転入してきた方で仮設に入居された方。看護師が巡回時、「この子に手を挙げ殺してしまうのではないか」との訴えあり、保護して支援した経緯がある。他所から来て周りとも溶け込めず、孤独感を感じている。色々な方が支援のネットワークをつくり、持ち直された。
- ・8月9月以降は心のケアを重点的にやった。子ども総合センターの巡回を受けた子ども、保育所の巡回もやって頂いた。
- ・県の事業で「心の健康サポート事業」が9月からあり、1.6健診、3歳児健診の際に、臨床心

理士を派遣して頂くという事業、「心の問診票」を母親に書いて頂き、個別支援が必要な方は健診が終わってから、心理士に別個に面談して頂いた。

・心理士に入って頂き、助かっていると実感。保育所で被災した児相さんの心のケアを受けた子ども、心理士に面談の結果、保育所に迎えに行つて、車が波にのまれそうになる中、何とか助かった。父親が今 PTSD で治療しているということも聞いた。その後の子どもの経過がわかるきっかけになった。

・ケースとして相談が上がってきたのは4月に入ってから。一番大変だった時期に来られても、それはどうかと思う。心のケアチームは大人に関しては3月下旬に入った。子どものケアについても入って頂けば良かったと思う。それまで気づけなかった。

・同じ保育所で被災した子どもの母親で今年出産された方がいる。子どもが先生の車に乗って津波にのまれた。2 晩くらい母親と会えず、その母親が未だに町に対する怒りている。健診でお会いし話を聞く。母親に少し問題が出ているのかも知れない。

・最近二人目の出産をされた、産後鬱のスクリーニングをかけたら高くなっていた。どう関わったらいいのか。そういう方がお一人いらっしゃる。

問6-1. 昨年10月以降から現在まで(フェーズ4)に、妊産婦や乳幼児をもつ母子、障がい児や低出生体重児をもつ母2に対しどのような支援(物資、場所、周知方法などを含めて)をしましたか。あるいは、どのような支援が必要だったと思いますか(不足していた物資を含めて)。また、経験した困難なことやその解決策などがあればお聞かせください。

・通常業務+被災者支援。

問6-2. 10月以降から現在まで(フェーズ4)にそのほかの母子保健に関わること(例えば、外国人母子への対応、親を亡くした子どもへの対応、性被害の予防など)で支援したことはありますか。また、必要だったと思う支援がありますか。また、経験した困難なことやその解決策などがあればお聞かせください。

・被災して仮設に入居した。

・通常業務+被災者支援。

問7. 発災前には、どのような母子保健活動をしていましたか。その時に課題であったことは、発災後はいかがでしたか。

・「母親自身がわが子の発達発育を経年的に理解できる力をつけること」を目標に。

・肥満、虫歯が多い→避難所での食生活、衛生管理が悪い。

・特定健診でも肥満、高血糖問題あり。

・発災前後で母子保健活動の課題やすべき事は大きな変化なし。

・震災後の余震や生活環境、家庭状況の変化に伴う子どもの心の不安定さの相談はあったが、通常業務が再開されたのが5月からだったので大分子どもたちも落ち着いてきている状況だった。また、状況のひどいケースがいれば専門の子どもの心のケア相談につないだ。

・震災前から健診の方法を変えたいと思っていた。この機会に思い切って変えてみた。問診票を以前は来てから書いて頂いたのを改善、母親が子どものことをみる力をつけていただくこと、

<p>母親達との話し合いを重視、問診票や問い合わせ、学習会等、健診の中身を変えた。</p>
<p>問 8. 災害を経験され、平時から必要な母子保健活動として、どのようなことがあると思われますか。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 肥満、虫歯が多い→避難所での食生活、衛生管理が悪い。</li> <li>・ 特定健診でも肥満、高血糖問題あり。</li> <li>・ 災害時は市役所やその他公共機関の支援が平常時と同じように受けられるとは限らない。住民一人ひとりが自分の身や子どもの身をどのように守るかの知識を身に付け、災害時に備えて準備・備蓄等しておく必要がある。母子保健活動の中でも、災害時に自ら身を守るため知識等について啓蒙・普及が必要。市役所のマンパワーも限界があり、災害時の備えや支援を。</li> <li>・ 支援者、派遣期間によって色々でした。煩わされたのはスポット、短期で来られた場合。自己完結型でやって頂くと助かる。</li> <li>・ 支援看護師には、「自分達で引き継ぎ、その他をしていただけない限り、受け入れられません」と最初に言ったので、入ってこられる看護師に関しては負担が少なかった。</li> <li>・ 最初に来て頂いた助産師は、元々健診などでお願いしていた方、何かをお伝えしないと動けないということではなかった。</li> </ul>
<p>問 9. 支援者ご本人やそのご家族の健康管理、あるいは生活管理をどのようにしていましたか。また、どのように健康管理や生活管理をする必要があると思いますか。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 6時から6時 自宅</li> <li>・ 6時から9時 自宅</li> <li>・ 6時から次の6時 夜間3時間起きる</li> </ul>

## インタビューガイド

研究協力者のメンバーの属性（宮城県 N 県 県保健師）

1. 県（5人） 2. 市町村（ 人）

問1-1. 発災（3月11日）から3月14日頃（フェーズ0・1）に行政職員として優先して実施した業務はどのようなことでしたか。

- ・4歳児健診終了10分後に発災。母子は全員帰宅。災害時は災害本部からの指示を待って行動だったが、通信手段が途絶える。避難者が来たのでその対応。
- ・津波が来るため、避難者と上の中学校へ。当日は避難所の対応。
- ・母子保健の対応よりも全体の避難所対応が中心。
- ・濡れている避難者の着替え手伝い。安全なところへの誘導。
- ・看護職・保健師が少ないため、避難所に張り付けない。大きな避難所をまわり、相談を受ける。
- ・本部との連絡がとれないため、この地区に災害対策本部を作る。
- ・作業所に勤務していた精神障害者12～13人を体育館から市内精神科に移動。
- ・物資が何もなく、紙もボールペンもなかった。
- ・集会所に発電機、非常用電灯が完備しており、TV等の情報が入った。
- ・トイレの衛生管理が大変だった。プールの水を流すが、浄化槽がいっぱいになる恐れがあったため。
- ・13日にDMATが派遣される。避難所、在宅で支援が必要な所に巡回をしてもらう。

問1-2. 発災（3月11日）から3月14日頃（フェーズ0・1）に妊産婦や乳幼児をもつ母子に対して、また、障がい児や低出生体重児をもつ母子にたいして、どのような支援（物資、場所、周知方法などを含めて）をしましたか、あるいはどのような支援が必要だったと思いますか（不足していた物資を含めて）。また、経験した困難やその解決策などをお聞かせください。

- ・避難所に居る妊婦、小さい子どものいる母親の相談を受ける。
- ・この地域の病院の状況がわからないため、妊婦には他県で受診するように手配。
- ・オムツ、ミルクが足りないとの声があったが、物資として置いていないため対応できず。
- ・ミルクは一晚分と次の日の朝まで渡した。掲示板に物資の状況を掲示して、見てもらえるようにした。
- ・近隣の産婦人科から市役所に避難した母子が居た（産後2日目、退院間際など3,4組）
- ・部屋を分け、暖房を入れるなどして環境を整える。ミルク等は持参、看護師が付き添っていたため、以降は任せる。
- ・ライフラインが途絶え避難してくる人が多かったが、部屋を別にできず、乳幼児を持つ母親が遠慮して3日目には自宅に戻っていた。

問1-3. 発災（3月11日）から3月14日頃（フェーズ0・1）に、そのほかの母子保健に関わる事項（例えば、外国人母子への対応、親を亡くした子どもへの対応、性被害の予防など）で支援したことはありますか。あるいは、どのような支援が必要だったと思いますか。

<p>か(不足していた物資を含めて)。また、経験した困難やその解決策などをお聞かせください。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 子供を亡くした母親への対応。看護師が一日付き添っていた。</li> </ul>
<p>問2-1. 昨年3月中(フェーズ2)に、妊産婦や乳幼児をもつ母親がいましたか。障がい児や低出生体重児をもつ母子がいましたか。いた場合、どのような支援(物資、場所、周知方法などを含めて)をしましたか。あるいは必要であったと思う支援がありますか(不足していた物資を含めて)。また、経験された困難やその解決策などをお聞かせください。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 16日に自治体の保健師の支援。在宅の母子、妊産婦の訪問をしてもらう。</li> <li>・ 電気が無いため、妊産婦のデータがない。地図を渡して訪問を行なってもらう。朝夕情報共有。</li> <li>・ 訪問の際の記録フォーマットは、支援保健師から提供。</li> <li>・ 母子の巡回のほか、ミルクやオムツを取りに来た母子の記録を取り、確認を始める。</li> </ul>
<p>問2-2. 昨年3月中(フェーズ2)に、そのほかの母子保健に関わること(例えば、外国人母子への対応、親を亡くした子どもへの対応、性被害の予防など)で支援したことはありますか。必要だったと思う支援がありますか(不足していた物資を含めて)。また、経験した困難やその解決策などをお聞かせください。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 3/22より他地域から保健師が援助。そのほか退職した保健師も参加。母子に限らず巡回訪問開始。</li> <li>・ 3/18から精神科医と共に障害児の家庭・避難所訪問</li> <li>・ 物資は充実してきたが、子ども用の医薬品(風邪薬など)が不足。子どものいる家庭から提供してもらう。</li> </ul>
<p>問3. 通常業務、例えば乳幼児健診や予防接種などはいつ頃から再開されましたか。再開に向け苦労されたことや支援が必要であったことがありましたか。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 通常業務再開のため、医師への交渉を始める。</li> <li>・ 保健センターが避難所になっているため、健診等を行う場所がない。場所の確保の準備。</li> </ul>
<p>問4-1 昨年4月から5月(フェーズ3)に、妊産婦や乳幼児をもつ母親がいましたか。障がい児や低出生体重児をもつ母子がいましたか。いた場合、どのような支援(物資、場所、周知方法などを含めて)をしましたか。あるいは、どのような支援が必要だったと思いますか(不足していた物資を含めて)。また、経験した困難やその解決策などをお聞かせください。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 母子手帳発行、乳幼児健診の情報発信開始。電話、もしくは訪問。</li> <li>・ 4月から市立病院、小児科が再開し始める。</li> <li>・ 4月半ばから新生児訪問開始。</li> <li>・ 5月から乳幼児健診再開。2箇所で行っていたものを一箇所で。</li> <li>・ 健診で心の間診票を使用した要ケア者のリストアップ。心のケアチームにつなぐ。</li> <li>・ 携帯電話の番号を記入しておいてもらったことで、連絡が付きやすくなった</li> </ul>

<ul style="list-style-type: none"> <li>・他の地域に避難している母子の健診の受診のために、依頼票発行。</li> </ul>
<p>問4-2. 4月から5月（フェーズ3）に、そのほかの母子保健に関わる事（例えば、外国人母子への対応、親を亡くした子どもへの対応、性被害の予防など）で支援したことはありますか。必要だったと思う支援（物資、場所、周知方法などを含めて）がありますか。また、経験された困難やその解決策などをお聞かせください。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・アレルギーの子どもへの対応がうまく行かなかった。アレルギーショック支援などがあったが、うまく繋げなかった。</li> <li>・仮設訪問開始。子どもの遊び場がない、祖父母との急な同居でのストレスなどの相談を受ける。</li> </ul>
<p>問5-1. 昨年6月から9月まで（フェーズ4）に、妊産婦や乳幼児をもつ母親がいましたか。障がい児や低出生体重児をもつ母親がいましたか。いた場合、どのような支援（物資、場所、周知方法などを含めて）をしましたか。あるいは、どのような支援が必要だったと思いますか（不足していた物資を含めて）。また、経験された困難やその解決策などをお聞かせください。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・居住環境の変化による、母親のストレスが目立つ。市内数カ所で移動子育て相談開始。</li> <li>・子育て相談を年6回から12回に増加。1回の参加者が2,3倍に。同じ仮設で誘い合ってくる事などもあった。</li> <li>・ポリオ予防接種開催。</li> </ul>
<p>問5-2. 6月から9月まで（フェーズ4）に、そのほかの母子保健に関わる事（例えば、外国人母子への対応、親を亡くした子どもへの対応、性被害の予防など）で支援したことはありますか。必要だったと思う支援がありますか。また、経験した困難なことやその解決策などがあればお聞かせください。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもを亡くした親に関しては、その事を夫婦でも考えたくないと言われる事が多い。長いスパンで考えていかなくてはいけない。</li> </ul>
<p>問6-1. 昨年10月以降から現在まで（フェーズ4）に、妊産婦や乳幼児をもつ母子、障がい児や低出生体重児をもつ母2に対してどのような支援（物資、場所、周知方法などを含めて）をしましたか。あるいは、どのような支援が必要だったと思いますか（不足していた物資を含めて）。また、経験した困難なことやその解決策などがあればお聞かせください。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・継続して母子への対応。</li> </ul>
<p>問6-2. 10月以降から現在まで（フェーズ4）にそのほかの母子保健に関わる事（例えば、外国人母子への対応、親を亡くした子どもへの対応、性被害の予防など）で支援したことはありますか。また、必要だったと思う支援がありますか。また、経験した困難なことやその解決策などがあればお聞かせください。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・継続して母子への対応。</li> </ul>
<p>問7. 発災前には、どのような母子保健活動をしていましたか。その時に課題であったことは、発災後はいかがでしたか。</p>

- ・震災前は県の保健師等と交流することもなかったが、今回様々な協力をしてもらったおかげで、相談がしやすい間柄になった。
- ・人数が少ないため、母親と顔の見える間柄だった。そのため、相談しやすいと感じてもらえたかと思う。
- ・保健師の仕事が地域分担制でなく業務分担制のため、有事の際、地域のことや誰に声をかければいいのか分からず、大変困った。
- ・上記を受けて、昨年からは業務分担制と地域分担制を組み合わせて担当していくことになった。
- ・その地域のキーパーソンや、民生委員などつながっておき、そこから情報収集をするのは大切。

問 8. 災害を経験され、平時から必要な母子保健活動として、どのようなことがあると思われますか。

- ・個人レベルでのボランティアの申し出を調整するのは大変だった。自治体、正規の団体経由だとなんとか振り分けも可能だが。
- ・物資の振り分けが大変だった。
- ・自分が様子を見ている子ども達がいるが、他の保健師が見ている子どもの情報は共有していなかった。自分が分かっているだけではだめ。情報共有が必要。
- ・記録についても、他者が見て分かるようなものにして置かなければいけない。
- ・有事の際に真っ先に確認しなければならない人のリストの必要。

問 9. 支援者ご本人やそのご家族の健康管理、あるいは生活管理をどのようにしていましたか。また、どのように健康管理や生活管理をする必要があると思いますか。

- ・3月は休むどころではなかった。いつまでこの状態が続くのかと言う点では厳しかった。
- ・どれくらいで避難所がなくなるのか、支援はいつまで続くのかなどの判断のものさしのようなのが必要。

## インタビューガイド

研究協力者のメンバーの属性（福島県 0市 1市）

1. 県（ 人） 2. 市町村（5人）

問1-1. 発災（3月11日）から3月14日頃（フェーズ0・1）に行政職員として優先して実施した業務はどのようなことでしたか。

- ・ 休暇中だったが、夕方出勤し避難所の設営、運営を行い、その晩は当直にあたった。
- ・ 本庁で会議中、外来者の避難誘導にあたる。保健センターに帰還し避難所開設の準備。
- ・ 休暇中、区役所に一時避難。家族と連絡とれず、翌日、自宅近くの区役所に出勤し避難所の救護に従事。
- ・ 10ヶ月健診中、母子を避難誘導した。その後保健センターを避難所にする準備。避難者の受入。
- ・ 勤務先に出勤し避難所にて、炊き出し等実施。
- ・ 津波、原発で避難した住民の避難所を巡回。
- ・ 区役所のホワイトボード等に、避難者の情報等を張り出す。

問1-2. 発災（3月11日）から3月14日頃（フェーズ0・1）に妊産婦や乳幼児をもつ母子に対して、また、障がい児や低出生体重児をもつ母子にたいして、どのような支援（物資、場所、周知方法などを含めて）をしましたか、あるいはどのような支援が必要だったと思いますか（不足していた物資を含めて）。また、経験した困難やその解決策などをお聞かせください。

- ・ 家の強度に不安のある家庭、家に帰っても子どもと二人きりになってしまうような母子は、保健センターに続々と集まっていた。
- ・ この部屋は母子、高齢者、障害者、と割り振りを事前に決めておけば良かった。その場で慌てて決めて、後手後手に回ってしまった。

問1-3. 発災（3月11日）から3月14日頃（フェーズ0・1）に、そのほかの母子保健に関わる事項（例えば、外国人母子への対応、親を亡くした子どもへの対応、性被害の予防など）で支援したことはありますか。あるいは、どのような支援が必要だったと思いますか（不足していた物資を含めて）。また、経験した困難やその解決策などをお聞かせください。

- ・ 各避難所にて母子への対応

問2-1. 昨年3月中（フェーズ2）に、妊産婦や乳幼児をもつ母親がいましたか。障がい児や低出生体重児をもつ母子がいましたか。いた場合、どのような支援（物資、場所、周知方法などを含めて）をしましたか。あるいは必要であったと思う支援がありますか（不足していた物資を含めて）。また、経験された困難やその解決策などをお聞かせください。

- ・ 3月15日屋内待避指示が出るも、避難所からの依頼で訪問し健康相談実施。政府から屋外に出る際の対応などの情報を提供されることはなかった。
- ・ 3月15日から19日にかけてバスによる集団避難開始、避難所からも移送した。
- ・ 地域の在宅者の安否確認訪問を幼稚園教諭と共に支援物資を配給しながら行った。